

# 磯焼け対策緊急整備事業

## 漁場環境保全創造事業

中西達也

播磨灘南部地区では、平成18～19年度に自然石を着生基質としてマウンド状に設置し、海底面を高上げ（光量確保）することで、ガラモ・カジメの藻場（6ha）を造成した。

阿南地区においても、平成21年度から播磨灘南部地区と同様の工法で藻場造成工事を開始した。

これらの藻場を効率的に造成し、良好に維持するため、平成19年度から平成21年度にかけて、造成場所の一部において着生基質の更新、母藻の供給、食害生物の駆除を実施しその後の状態をモニタリングした。

### 材料と方法

#### 1. 播磨灘南部地区

平成19年10月に実施したカジメ基質更新場所（大浦工区）、アカモク母藻移植場所（粟田工区）、平成21年2月に実施したアカモク母藻移植及び基質更新場所（櫛木工区）について、定期的に海藻現存量を調べ、景観の写真（ビデオ）撮影をおこなった。

#### 2. 阿南地区

平成21年度に福村、中林、大湊の各工区において、自然石を着生基質としてガラモ・カジメの藻場が造成された。これら造成地及びその周辺藻場の現存量、食害生物の生息状況などを調査するとともに景観の写真（ビデオ）撮影をおこなった。

### 結果と考察

#### 1. 播磨灘南部地区

##### (1)大浦工区

基質更新をおこなった場所を含め、藻場造成地のほぼ全域でカジメが着生していた（写真1）。カジメ、アカモクの現存量の推移を図1に示す。

##### (2)粟田工区

アカモク母藻移植をおこなった場所を含め、藻場造成地のほぼ全域でアカモクが生育していた（写真2）。カジメ、アカモクの現存量の推移を図2に示す。昨年よりもアカモクの現存量は減少した。

##### (3)櫛木工区

平成21年2月に基質更新をおこなった場所では、7月にフトモズクの生育を確認した（写真3）。翌年1月にはアカモ



写真1. 大浦工区のカジメ藻場（平成21年7月14日）

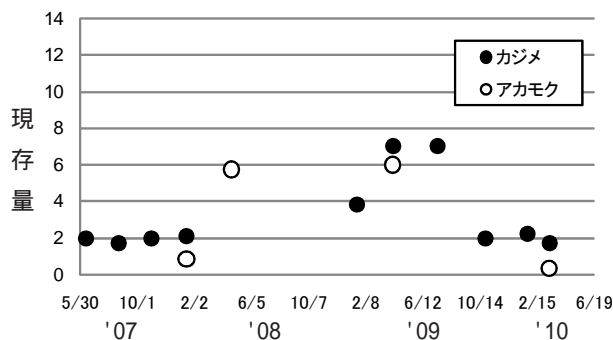


図1. 大浦工区のカジメ、アカモク現存量 (kg/m<sup>2</sup>) の推移

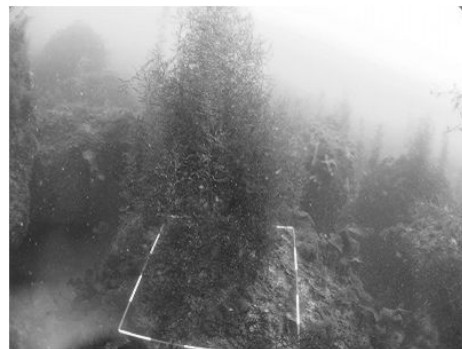


写真2. 粟田工区のアカモク藻場（平成22年1月20日）

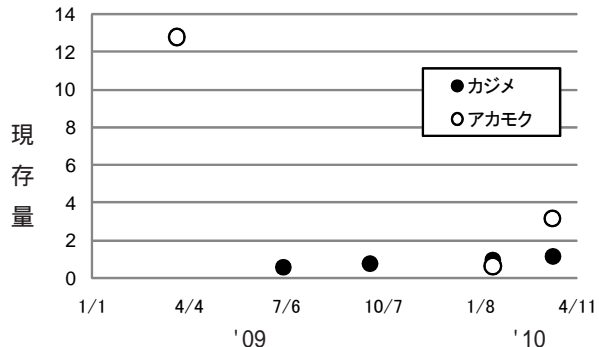


図2. 粟田工区のカジメ、アカモク現存量 (kg/m<sup>2</sup>) の推移

ク幼体を確認した(写真4)。カジメ、アカモクの現存量の推移を図3に示す。昨年よりもアカモクの現存量が減少した。減少要因としてウミウチワなどの小型海藻が着生基質を広く覆っていること及び浮泥の影響が考えられた。

## 2. 阿南地区

### (1) 福村工区

平成22年2月5日の調査では、造成地南側約50mにあるハエとその周辺の砂礫地にカジメ藻場が形成されていた(写真5)。この藻場におけるカジメ現存量は531g/m<sup>2</sup>だった。

### (2) 中林工区

平成22年3月12日の調査では、造成地周辺にはハエがあり、潮間帯下から水深7mの砂礫地までカジ

メ・クロメ藻場となっていた(写真6)。この藻場におけるカジメ・クロメの現存量は3,722g/m<sup>2</sup>、ワカメ971g/m<sup>2</sup>だった。

### (3) 大瀧工区

平成22年2月15日に調査をおこなった。造成地の周辺にはハエがあり潮間帯下から水深7mの砂礫地はカジメが見られた(写真7)。この藻場におけるカジメの現存量は2,076g/m<sup>2</sup>だった。

阿南地区では、いずれの工区も食害動物の生息数は少なく、食害が問題になっている工区は見当たらなかった。また、種苗供給や母藻移植が必要と考えられる所もなかった。

今後もモニタリングを継続し、必要な対策がないか検討する。

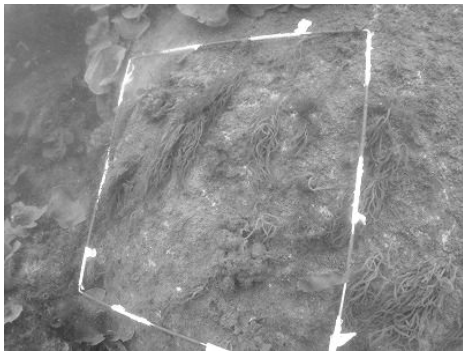


写真3. 櫛木工区基質更新箇所に生育するフトモヅク(平成22年7月3日, 水温23, 水深5.5m)

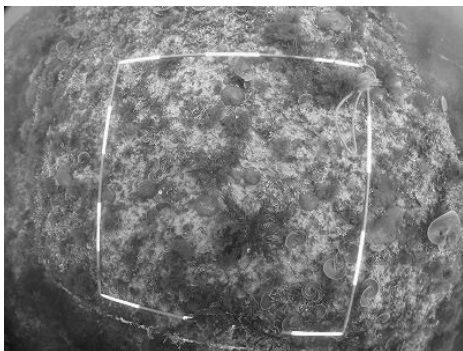


写真4. 櫛木工区基質更新箇所に生育するアカモク幼体(平成22年1月20日, 水温10, 水深5.5m)



写真5. 福村造成地付近の砂礫地のカジメ藻場(平成22年2月5日, 水温10, 水深5.8m)



写真6. 中林造成地付近のカジメ・クロメ藻場(平成22年3月12日, 水温13, 水深4.2m)



写真7. 大瀧造成地近傍のカジメ場(平成22年2月15日, 水温10, 水深7m)

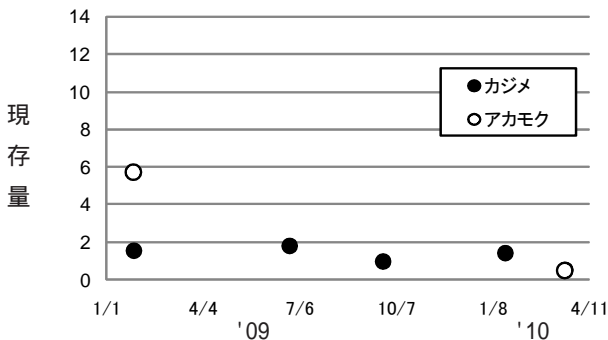


図3. 櫛木工区のカジメ、アカモク現存量(kg/m<sup>2</sup>)の推移